

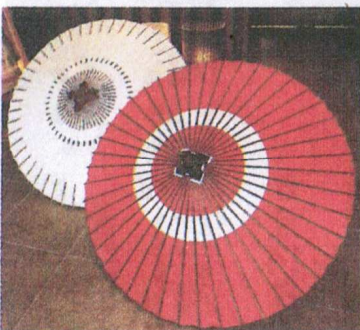
## —職人技の世界— Crafts &amp; Arts



和傘の材料。骨格となる骨は真竹を使用



口クロの穴に針を通し小骨を糸でつなぐ



完成した和傘



傘に折り目をつける、姿付けを行う松本さん

## 日吉屋

京都市上京区寺之内通星川東入百々町546

☎075(441)6644

てわざ  
かみわざ手  
技

神

## 和傘の革新に挑む

## 京和傘

和傘は日本の伝統文化と深くかかわる小道具。日常使いの番傘やオシャレ用の蛇の目傘、茶道で使う野点傘、結婚式や祭に使われる傘など、意外と活躍の場は幅広い。パツと傘を広げるだけで、いかにも日本的であでやかな美しさを演出できるのが何よりの魅力だろう。現在、最大の産地は岐阜だが、京都には野点傘に代表される京和傘がある。

そんな京和傘を作るのが、京都ではただ一軒となった日吉屋だ。江戸時代後期の創業以来、伝統の製法を守り続けている。材料も昔とほとんど変わらず、竹や木材、和紙、柿渋、亜麻仁油、タピオカ糊など、ほぼすべて

天然の素材が使われる。環境にも優しい。和傘の製造は分業制で、骨組みは竹骨職人、傘の開閉の要となる口クロは日本でただ一軒という木工職人、和紙は和紙職人が担う。こうして複雑な工程を経て作られた材料がすべて揃ったところで、ようやく和傘職人の登場となる。

日吉屋の仕事はここからで、まずは「下事」と呼ばれる骨組み作業から。下口クロに木綿糸で一本ずつ小骨をつなぎ、そこに親骨をつなぐと、ほぼ傘の原形が出来上がる。その後、和紙を貼る。親骨の中節の部分に「中置紙」、傘の周囲に「軒紙」、傘本体の「胴紙」を貼る。天口クロに和紙を「カラ巻き」し、周りの「みの」に和紙を貼って仕上げ、傘の内側の「手元」部分にも和紙を貼る。糊が乾いたら、傘に正しいたたみ癖をつける「姿付け」。「きれいにたためば再び一本の竹に戻る」という作業で、ここで美しい傘の基本が決まるといえる。

傘の頭の部分を和紙で



和傘の特徴を生かした新しい照明器具「古都里・KOTORI」シリーズ

包む「頭包」。骨の上に塗料のカシューを塗り、防水補強のための「油引き」を行う。そして傘の内側を糸で飾る。最後は天口クロをナイロンで覆うカッパ付けで、真田紐を結んで完成。ここまで10日ほどかかる。

こうした新しい和傘の製造に加え、京都では古い傘の修復も多い。例えば、祇園祭で使われる傘もそのひとつ。若き職人のひとり松本光彩さんは「修復作業を通して歴史を体感できるのは職人の醍醐味」と話す。

かつて中国から伝わった傘は、日本の長い歴史の中で改良を繰り返して、シンプルで非常に高度な構造をもつ和傘となった。強くて繊細な和紙を通したやさしい光、竹骨の織り成す幾何学模様は和傘ならではの美しさだ。そんな魅力を広く伝えたいと、和傘の特徴を生かした照明器具を日吉屋五代目主人の西堀耕太郎さんが考案。今や世界のインテリア業界で人気を博している。和傘の可能性は、今後ますます広がりを迎える。訂正 346号(5月16日号)掲載の浅田製瓦工場の電話番号は「075(601)1506」の誤りでした。